

知らせる◎カミングアウトとは?◎

【エピソード】

タケシさんは25歳の時、自分がエイズ発症していることを知りました。しかし、それをなげくばかりではありませんでした。自分自身の病をありのまま見つめ、受け入れ、そして、「自分のやり方でエイズとつきあいたい」「自分なりのやり方で病とたたかいたい」と考えました。その後、彼は自分の体験を書いたり、TVディレクター・俳優・医師・学生などとの、いくつもの対談を実現したり、自分の考えを知らせていきました。いくつもの対談のなかから、タケシさんと歌手のイズミさんとの対談の一部を紹介します。

タケシ 3年ほど前にイズミさんがエイズになったって、^{ちまた}巷ですごい噂になりましたよね。その時どんな気持ちでしたのか、正直なところをお聞きしてみたかったです。

イズミ まずはね、すごくびっくりした。そして、いろんなことを考えさせられました。…エイズってひとつの病気じゃないですか。なのに、なんでこんなに差別的な状況が生まれるのだろうって。もしちがう病気だったら、こんなふうには噂にならないし、むしろ逆に美談になったりするでしょ。実はね、精神的にはかなりつらかったんです。でも、あの噂をたてられたことで、エイズにかかっている方の気持ちが、ちょっとだけわかった。私と同じように精神的につらいだろうし、それだけではなくて、病気で身体の方もつらいんだろうなって。だから、すごく大変だろうなって。

タケシ 感染を否定する記者会見は開かなかったんですか？

イズミ ええ。自分から積極的に記者会見をして、いろんな人に知らせる必要はないかなって思ったんです。なんていうのかな。噂をたてられて、初めて患者さんの気持ちが身にしみたんです。

「私はエイズじゃありません」と宣言することは、なんだか抵抗があったんですよ。本当に病気と闘っている患者さんが傷つくような気がしてね。だって、エイズというのは、病気であって、別に悪いことをしたのでもなんでもない。それなのに、わざわざ公に否定しなければならぬのも、どこか変でしょう。私が噂をたてられたことで、誰にも傷ついてほしくないって思ったのね。傷ついてほしくない人の中には、エイズの患者さんも入っていました。



対話の
ために

- もしも、あなたがイズミさんのように噂をたてられたら、どのように対処しますか？
- 記者会見などを開かなかったイズミさんの態度について、どう思いますか？

イズミさんのひとりごと



自分から積極的に記者会見をして、いろんな人に知らせる必要はないと思っても、その一方では、私の身体を心配してくれているファンがいます。あの噂は本当なのかどうかって、やきもきしています。だから、ファンのみなさんだけには、真実を知らせたいと思ったんです。それで考えました。エイズ検査の結果表をそのままおシャレなTシャツにプリントして、下に英語のメッセージを入れたんです。その内容を知りたい人は、訳せばわかるっていう形にしたの。ちょうど私の写真集が出る時だったので、最後のページにその写真をさりげなく載せました。説明とかはつけずに、「噂に感謝します」っていうフレーズを英語にしたんです。



噂に感謝します。

このような差別が私たちの中に

広まっていたなんて、

本当に驚いています。

でも、もし噂されていなかったら、

私は決して気づかなかっただしょう。

だから、この不可思議な噂に感謝したい。

一番大切なことを気づかせてくれたから。

タケシさんのひとりごと

ぼくは自分自身のやり方でエイズとつきあおうと決めました。友だちとか、大丈夫だって思える奴には、ほとんど全員に言いました。けれど、コイツに言ったら変わっちゃうな、という奴には言っていない。誰だって、自分らしくありたいし、こうだったらいいな、という方向へと自然に生きていきたいわけです。その際、エイズであることを隠していることが不自然だったり、隠して生きることに疑問を持つような人は、自然にカミングアウトしていくと思います。けれど、家族の問題とか、地域で置かれている立場などから、知らせたくない人もいます。人に知られずに、そのまま自分の夢を実現したいという人もいます。カミングアウトする人と、しない人が出てきて当然だと思います。ぼくだって、相手によって、状況によって、カミングアウトする場面としない場面があるんです。

参考資料:「エイズを100倍楽しく生きる」/大貫武、山下柚実、片野明/径書房/

対話の
ために

- 「噂に感謝します」っていうフレーズには、どんな意味が込められているのでしょうか？
- 2人のひとりごとを読んで、感じたことを出し合ってみましょう。

【ミニ解説】

◎エイズ

HIV(Human Immunodeficiency Virus=ヒト免疫不全ウイルス)によって、体の抵抗力を担う免疫系が破壊される病気です。HIVに感染することによって、様々な細菌、ウイルス、かび、寄生虫の生体への攻撃を防げなくなり、感染症を起こしたり、悪性腫瘍^{しゅよう}など様々な病気が発症します。HIVは主にリンパ球(白血球の一種)を攻撃し、その結果免疫系の指令部が破壊されます。リンパ球数が低下すると、AIDS(Acquired Immune Deficiency Syndrome=後天性免疫不全症候群)を引き起こします。したがって、エイズはとても長い経過をたどる「HIV感染症」のある時期からの呼び名で、現在は医療の進歩によって、エイズ発症を遅らせることが可能となってきています。

◎エイズと共に生きる時代

HIVは、感染力の弱いウイルスですから、患者や感染者と一緒に生活しても、日常生活ではうつることはなく、また、現在では性行為による感染がほとんどを占めていますので、予防することが可能な病気です。

病気をもつということは、生活に困難と苦痛を伴う場合があります。それは、病気そのものよりも、周りの対応、社会の支援が大きく関係しています。感染した人が安心して病気と闘うことができるよう、共に支え合うことが大切です。

アメリカでは、1990年に「障害者保険法(ADA)」が制定されました。HIV感染者の権利を守ることはもとより、感染者と一緒に働きたくないという人がいた場合、その人を解雇することができるという法律です。同時に企業は従業員に対してエイズ教育を徹底することになりました。

◎カミングアウト

カミングアウトとは、社会的に被抑圧の立場にいる者が、自分を肯定し受け入れた上で、自分の立場を自分以外の人に言い、相手との関係性を新しく組み替えていくことを表す言葉です。「カミングアウト」はアメリカで「coming out of the closet」の短縮形として使われるようになったもので、「押し入れの中から出てくる」という意味です。「押し入れ」というのは、社会の抑圧によって、自分のことを隠さざるをえない状態を指しています。「押し入れ」に入っていないと、嫌がらせを受けたり、学校や職場にいられなくなったりするという状態のことです。

こうした「押し入れ」から出てくるには、自分を肯定し、自分に自信を持って生きていく決意と仲間の支えが不可欠になります。ただ、「秘密の告白」をすることではありません。お互いの違いをしっかりと認識した上で、関係性を作り直すことが「カミングアウト」、つまり「押し入れ」を出て、新しい生き方を作ることなのです。状況によっては、ある場所であえてカミングアウトしないという選択肢もあります。カミングアウトしたときのリスクと、自分の内面との微妙なバランスとタイミングを考えて行動せざるを得ないのが現状です。「カミングアウト」できないのは自分が弱いからだ、自分を責める必要はありません。



からひろげていくと



1

Aさんは54歳。会社員として30年間勤めてきました。40歳を超えたころ、足の膝あたりにひどい肌荒れが始まり、「尋常性乾癬症^{かんせんしょう}」という診断を受けました。日本では1000人に一人がかかる病気と言われています。感染性の病気ではなく、体質的に皮膚が早くでき、かさぶたとなってぼろぼろと皮膚がはがれます。本人は痛みもかゆみもありませんが、とても重篤に見えます。

症状が一定でないため一律な治療法があるわけではなく、塗り薬や光線療法などで治療しましたが、十分な効果は出ていません。

これまでは目立つ場所にはなかったため隠していました。会社の慰安旅行でも入浴は避けていました。

ある時、慰安旅行でどうしても温泉に入ることとなり、意を決して事前に同僚に話をしたところ、病気についてみんな理解してくれました。

しかし、実際に温泉に入ろうとしたとき、自分の足元をわざと見ないように気を使う同僚の心配りに、ありがたさといったまねさを感じるところはあります。



2

Bさんは、30代の中学校の教員。子どもたちに「性の多様性を伝える授業」をしています。「子どもたちにありのままに生きてほしい、教員である自分がカミングアウトすることで救われる当事者の子どもがいるかもしれない」と思って始めました。

Bさん自身が、ゲイである自覚を持ったのは、好きな男の子ができた小学5年生のときです。その頃、周りには否定的な情報しかなく、自分が同性愛者だと気づいたとき、誰かにばれてしまえば、自分だけでなく、家族までもこの地域で暮らしていけなくなるのではないかと悩み「絶対に誰にも言えない」と思いました。

しかし同時にこの社会が変わらないと自分は生きていけないとも感じていましたから、高校生のときには「学校を変えるには、自分が教員になればいいんだ」と考えるようになりました。大学生になったときに、1000人近いLGBTの当事者が堂々とパレードするのを見てLGBTは「いないのではなく、言えないだけだったのだ」と確信しました。

「子どもたちにありのままに生きてほしい」という願いを胸にBさんの教員としての挑戦は続きます。